

2016年度 湘南藤沢学会「研究助成基金」 成果報告書

活動名称 防災教育の水平展開を促す要因やそれを阻害する障壁についての調査

慶應義塾大学 政策・メディア研究科

修士1年 永松冬青

1. 活動の目的

東日本大震災以降、防災教育の重要性が再認識された(文部科学省, 2013)。しかし、その実施内容を考察すると、名目上の避難訓練の実施に留まっており、金井・片田(2015)は「災害から生き抜く力を育む」ための内容としては十分でない指摘している。その内容も義務教育課程で明確に定められておらず、その取組は学校現場の先生の裁量に委ねられており、熱心な先生の取り組みによって支えられている。その結果、防災教育の優れた取組が特定の学校や地域等の「点」で行なわれるのみに留まることが多い(文部科学省, 2007)。本研究では、その点を線でつなぐべく防災教育の全国的な水平展開を目指す。研究の第一段階として水平展開に成功している学校や自治体、地域の事例からそのために必要な要素を調査する。

本研究は、2016年度末から2017年度にかけて実施する予定であるが、時間と予算の都合上、今回はまず新潟県新発田市の二葉小学校にてヒアリングを実施した。二葉小学校は、2016年度に新発田市の防災教育モデル校として1年間防災教育に取り組んでおり、この成果をもとにして2017年度は、市内21の小学校全てで防災教育が行われる予定である。このことから、水平展開に必要な要素を調べるに適したフィールドであると判断し、ヒアリング先として二葉小学校を選定した。

2. ヒアリング実施概要

日時：2017年3月27日(月) 14:00~16:00

場所：新潟県新発田市 生涯学習センター

参加者：新発田市の方々

- ・新発田市立二葉小学校 校長 荒木一成
- ・新発田市中央公民館 館長 伊藤英策
- ・新発田市教育委員会 中央公民館社会教育係長 田中秀作

当研究室からの参加者

- ・政策・メディア研究科修士1年 永松冬青
- ・総合政策学部4年 山本真帆
- ・慶應義塾大学総合政策学部2年 宮崎真和

3. ヒアリングで明らかになったこと

新発田市立二葉小学校では“命”を基調とした教育活動が荒木校長先生を筆頭に展開されてきており、その一コンテンツとして防災に取り組んでいる。現場の先生方も“子どもの命を守る”ための学校の果たすべき役割として、防災を認識していることがわかった。（今後、実際に取り組んだ先生方の感想を調査し、防災教育を展開する上での障壁やモチベーションとなる要因を明らかにしていく予定である。）

また、地域と保護者に後押ししてもらいながら防災文化を根付かせていくことの重要性を強調していた。そうすることで、防災教育に散見される、熱心な先生が異動された等の理由で防災が途切れてしまう事態を避ける狙いがある。

さらに、新発田市では平成 29 年度より、防災事業の一環として市内にある小学校全 21 校が防災教育に取り組むことを義務付けているとのことであった。その中の体験学習の一つとして 6 月以降、各小学校が防災キャンプを新発田市青少年宿泊施設あかたにの家（元新発田市立赤谷小学校）で行う予定である。

4. 今後の展望

大木研究室としてはプログラム作成の上ですでに研究室として持っている防災コンテンツの提供やカスタマイズ、またこの防災キャンプを通してどのような効果を得ることができるのかといった教育現場での評価の部分、キャンプ前後の変化といった短絡的なものではなく、持続性という視点を持って一緒に考えていきたいと思っている。荒木校長先生は今年度で二葉小学校をご退職されるが、今後は新発田市教育委員会中央公民館内防災教育アドバイザーとして防災キャンプの運営等に携わられるため、今後も密に連携を取りながら進めていきたいと思う。

防災キャンプについては、5 月 15 日(月)、16 日(火)にキャンプに参加する 21 校から教員を集めて事前研修会が行われる。各校の具体的なキャンプのスケジュールは、研修会を受けて決定される。また、6 月から 9 月まで各校のキャンプの日程は決定している。これら防災キャンプを通し各校での防災意識の向上を期待し、事前研修会へ参加しキャンプの内容について防災教育の観点から使用出来るものを伝えていきたい。また、28 年度のモデル校であり防災キャンプを実施した 4 校から、ほかの学校への影響を調査する、横への展開が研究の目的であるため、訪問を重ね教員や児童にヒアリングやアンケートを行っていききたい。

他にも、現新発田市立二葉小学校校長であう荒木一成氏と連絡を取ることで、28 年度のモデル校であった二葉小学校の教員にアンケートやヒアリングをし、モデル校内での意識についても調査していく予定である。